
命〜mikoto〜 Director's Cut

黒羽 ジュコウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命（m i k o t o）Director's Cut

【Nコード】

N4042A

【作者名】

黒羽 ジュコウ

【あらすじ】

ふとしたきっかけで入院することになった少年と、重い病気を抱えた少女との、恋を超えた命の絆の物語。あなたは自分の命、粗末にしていますか？

(1) 初めに・・・(前書き)

命く mikoto の完全版です。
前作との違いを見つけるのも面白いかもしれませんよ？

(1) 初めに・・・

<人物紹介>

カシワバラ ヒロト
柏原 広人…17歳

健康診断の結果、小児科に入院することになった高校生。
楽天家で、自分の事はどうでもいいと思っている。

アンドウ コセ
安藤 古世…17歳

小学生の頃から入院している重病患者。
胸の傷の事でいじめられた過去を持つ。

タカハシ リョウジ
高橋 良治…35歳

広人たちの主治医。
言葉遣いから、その優しさが伺える。

ホシタニ スズコ
星谷 鈴子…23歳

小児科の看護師。
古世とは友達感覚で接している。

サコウ アヤカ
酒向 綾香…30歳

小児科の看護師。
豊富な経験を生かした良きアドバイザー

(2) 入院?

「は？小児科??」

真っ先に口から出た言葉が、それだった・・・。

四月、大抵の学校で行われる健康診断。

楽しみなのかイヤなのか分からないが、僕、柏原広人の通う高校でも決まって行われた。

健康体の広人にとっては、ただ待っているだけの退屈な行事・・・のはずだった。

「ちょっと、心臓に異常が見られますね・・・」
心電図を見た医者に、マジ深刻そうな顔でそう言われた。

(いやいや、そんな深刻な顔して言うなって!)

「一度、この病院に検査にいつてください」

(行っして下さいじゃねって!!)

渡された紙を見ると、病院の名前と・・・・・・・・

”小児科”

「小児科あ？」

「はい。まだ高校生だからね」

（何でガキの仲間入りしなきゃなんねーんだよ！）

まあ、病気に関しては医者言うことが全てなので、広人は渋々検査を了解した。

さらに、極度の楽観的な性格が手助けし、どうせすぐに治るさと思っ
てヘラヘラしていた。

なのに・・・

それなのに・・・

「入院・・・・・・・・ですか」

小児病棟で、入院することになってしまった。

そこで広人は、ある少女の出会いとともに”命”の尊さを目の当たりにすることとなる・・・。

あなたの身近に、重い病気を抱えている人はいますか？

あなたにとってその人は、どんな存在ですか？

そして・・・

その人にとってあなたは、どんな存在でいたいのですか？

家族？

友人？

恋人？

それとも――・・・

(3) 出会い

広人は学習面などに差支えがないように、入院の予定を夏休みの間と決めた。

そして八月……。

四月に検査しに来た以来の病院を目の前にし、大きなため息をついた。

(小児科ねえ……)

もう一度言うが、広人は”高校生”である。

なかなか進まなかった足をやっこの思いで動かすと、小児病棟を探した。

「西5階か……」

エレベーターで5階まで行き、ナースステーションの前まで行った。

「あのお……、今日からここで入院してくれといわれたんですケド……」

奥から、いかにも主治医っぽい人が出てきた。

「柏原広人君だね。僕は君の主治医の高橋です」

「よろしく……お願いします」

その後、手続きを済ませた広人は、主治医の高橋先生に案内され自分の寝床（病室）へと入った。

（うつわゝ……。予想通りっていうか、以上だな……。こりゃ）

病室には、餓鬼　ガキ　がき……。まさにちびっこのオンパレードだった。

「まあ、高校生の君にとっては多少過ぎしにくいだろうけど、病気を治すためだから」

「はぁ……」

その時、後ろから女の子の声が聞こえた。

「先生、やっぱりこの売店してるよ……。何もない」

声に振り向くと、そこには広人と同じくらいの年の女の子が立っていた。

パジャマにスリッパ、右手に財布、そして今の言葉からしてこの病棟の患者のようだ。

「僕にはどうしようもないからなあハハハ」

「すごく退屈なんだけどお」

「それも今日で終わるかもしれないよ？」

「何で？」

先生が僕を見ながら、

「今日から同じ病棟に入る柏原君。君と同じ高校生だ」

「マジっすか！」

その子につられて、

「マジです」と言ってしまった。

「先生、私この人に病院案内してきていいかな？」

「ああ、いいよ」

その子は僕の顔を直視した後、かわいい笑顔を見せた。

「私、安藤古世。よろしくねv v」

これが、広人と古世の出会い……。
いたって普通である。

(4) トモダチ

「古世っちの病院めぐりツアー！行ってみよう！！」

病院内にはさまざまな施設があり、古世はまるで子供のようにはしゃぎながら案内していった。

長期入院時のための理髪店や美容室、あまりにも品揃えが薄い売店、医師や看護師の聖地である食堂まであった。

中でも一番驚いたのは、小児科の入り口にプレイルームという遊び場があること……。

病院内をトコトコ歩き始めて1時間くらい経っただろうか。
突然古世が口を開いた。

「・・・ヒロ」

振り返った顔は笑顔で満ち溢れていた。

「ねえ、これからヒロって呼んでいい？」

「いきなり何だよ」

「だってさ、かしわばらって長いんだもん。舌噛みそう・・・」

もちろん呼んでもらえるのは嬉しい。でも抵抗もあった・・・。

僕には、友達がいなかった

だからもちろん、愛称と言えるものが無かった

呼ばれたとしても”カシワバラクン”

男からも滅多に呼ばれないのに、

女の子から”ヒロ”

「何でそう呼びたいの？」

「同じ病室の仲間・・・？違うな・・・」

そして古世は、はっきり言った。

「友達だから！」

トモダチ・・・

とてもいい響きだった。

「ありがとう」

「いえいえ、どーいたしまして。その代わり、私の事も名前で呼んでよ?」

「それはちよつと・・・」

「だめ! 友達だったらそのくらいして当然でしょ」

そう言うと、古世は広人の肩をぐつつかみ、そのぱっちりした瞳で見つめられた。

「さ、言ってみ」

「・・・古・・・世」

「ぎこちないぞ!」

「・・・古世・・・」

「んゝよくできました!」

古世は微笑みかけてきた。

こうして、広人にとって実質初めての女友達ができただった。

(5) 熱帯夜

入院二日目。

その日の夕食の後、広人と古世の二人はそれぞれのベッドに座り、話をしていた。

その話が一段落着いたとき、時計を見た古世が口を開いた。

「じゃあそろそろ寝ますか」

ただ今PM8…30・・・。

古世の言葉に、広人はとりあえず聞いてみる。

「さすがに早いよ。今の学生ってこれからが活動時間だぞ？」

「なあに言ってるの！ここ小児科だよ？小さい子の生活リズムに合わせてあるんだよ」

納得である。

古世の話によると、他の病棟でも就寝時間は早いのだが、小児科の病棟はさらに少し時間が早いらしい。

まだ暗くなったばかりの空を見ながら広人はボソッと呟いた。

「やっぱ無理。こんな早く寝れるかって・・・」

「気持ち分かるよ。私もはじめは慣れなかったもん」

古世が、パジャマの胸元をパタパタしながら言った。

「それにしても何か暑くない？」

「今日は熱帯夜です・・・とか言ってたような」

「まじで？」

「まじで」

「ヤバイ、聞いただけで汗かいちゃったよ・・・」

「着替えれば？」

古世は「そうする」と言っ、カーテンをひいた。

「覗くなよ」V

「見ないよ」

「本っ当やめてよ？自信ないんだから！」

（そっちかよ！！）

ズッコケそうになった・・・。

カーテンを引いたとき、やっぱり女の子だから恥じらいがあるのか
と思いきや、”自信がない”・・・。

「あ！今の撤回。自信あっても見せないからねー！」

「やっぱり・・・」

「え？見たかったの？？」

「いや、そんなことは・・・」

突然カーテンが開いたと思うと、カンペキに着替えた古世がそこにいた。

「ウソだv異性の身体に興味ない人なんていないからね」

「そりゃそうだけど・・・」

「やっぱり！ヒロのエッチ！スケベ！変態！！」

広人は、そこまで言われる筋合いは無いと思った。

「あれ？まだ二人起きてるの？？」

病室に、看護師の星谷が見回りにやってきた。

「あ、星谷さん。ゴメン」

「すみません」

「いいよいいよ。高校生に早く寝ろって言うほうが間違いだもん」

「そうだよねv」

「二人ともさ、22時ごろまではプレイルーム電気つけてるからさ、そこでしゃべってきたら？ここで話すと小さい子が起きちゃうから」

「いいの？星っち」

「無理はしないでね」

「はい！」

「行こっ！」

古世は広人の手を握ると、思いつきり立ち上がった。

「え、あ・・・えと・・・」

広人は少し戸惑う。

初めて女の子と手をつないだ・・・。

やはり命ある者の手はフワフワと柔らかく、温かかった。

(6) 遊戯場

手を引かれ、プレイルームに着いた広人は窓の外を見た。

「星ってこんな綺麗だったっけ・・・」

窓の外には満天の星空と、天の川が流れていた。

古世もその横に並び、同じように窓の外を一心に見つめている。

「夏は天の川があるからキレイだけど、冬は星空全体がキレイなんだよ」

「全体？」

「ん。何ていうのかな・・・、冬は空が澄み切ってるって言うのかな」

「冬の空って・・・、何で知ってるの？星が好きなの？」

すると古世はくると星空に背を向け、しゃがみこんで壁に背を預けた。

そして寂しそうな表情で言った。

「入院生活が長かったらいつの空でも見れるからさ・・・」

広人は、頭をガンと殴られた気分だった。

「・・・いつから、入院してる・・・？」

「小学校の時から入退院繰り返してるんだあ。すごいっしょ」

古世が広人の方を見上げる。

広人は、視線を感じながらも古世の方を向くことができなかった。

「知らなかった。ゴメン・・・」

「昨日知り合ったばっかなんだから、知らなくて当然だよ」

「そんなに、大変な病気なの？」

古世はうつむいた。

表情が読み取れない。

「よく分かんない。でもね、今まで何回も手術してるんだ」

広人は古世の隣に同じようにしゃがみこんだ。

「大変じゃん」

「もう慣れっこだから・・・。」

古世は、おもむろにパジャマのボタンをはずし始めた。

「ちょ、ちょっと何してんだよ！」

「何か勘違いしてるよ」

古世は全てのボタンをはずし、広人のほうに体を向けた。

「・・・!!」

言葉に、ならなかった。

パジャマの奥、古世の胸に数本の手術痕があるのが見えた。
古い傷、まだ新しそうな傷、痛々しかった……。

「この傷、一生残るんだって……」

「もういいよ……。もういいからボタンはめろって」

それ以上見ていたくなかった。

自分も、痛かったから……。

「ちょっと待った。じゃ、学校は……？」

「こんなじゃ行けないよ。友達もできないし。寂しかった……」

ずっとずっと寂しかったっ！

そう言って古世は膝を立て、顔をうずめて……。多分泣いていた。

「友達なら、ここにいないじゃない」

なんとフォローしていいのか分からず、今の広人にはそう言ってあげるのが、精一杯だった。

古世は顔をうずめたままだったが、はっきりとこう言った。

『ありがとう』

(7) 外泊・前編

翌朝、広人が起きると、何やら隣でガサゴソ音がしていた。

「古世？」

広人が不審そうにカーテンに手をかけると。シャツとカーテンが開き、私服姿の古世が立っていた。

ごく普通のTシャツにデニムのミニスカート、首にはネックレス、指輪まではめている。

顔は本当に薄めなのだがアイラインやグロスを入れている。

これだけ見ると、本当にイマドキの女子高生と言った感じだ。

病気であることを除けば・・・。

広人は普段見られない姿に、しばしの間見とれていた。

「おはよ。・・・ん？どしたの？？」

「いや、私服だから」

「変？」

古世が自分の格好を確かめるように見ている。

広人は思いつきり首を横に振った。

その動きを、さもおかしそうに古世は笑っている。

「良かった。こういう時しかオシャレできないから」

「何かあるの？」

「デートv」

「・・・」

広人は複雑な気持ちになった。

「ウソ！ただの外泊」

すると手を広げ、古世は演劇の役者のように語りだした。

「この窮屈なカゴから抜け出して、今こそ外の世界へ旅立とうではないか！

外には何が待っているかは分からないが、私は怖れず旅に出る！

」

今度は逆に広人がおかしそうに爆笑した。

「窮屈で悪かったわね・・・」

広人も古世も硬直した。

ゆっくり後ろを振り返ると、看護師達のボスとも言える酒向さんが立っていた。

酒向さんは、古世がはじめて入院した頃から頑張っている人で、古世とも普段は仲良しなのだが不適切な発言にはかなり厳しいお方だった。

「スイマセン・・・」

「ゴメン、酒向さん・・・」

「でも窮屈なのは確かか・・・」

するとたちまち古世は笑顔になり、

「でっしょ〜！」とか言っただもんだから・・・。

「調子に乗るな！外泊取り消してもらおうよ！！」

「ああ！それだけは勘弁してください」

「ま、冗談はそのくらいにして支度できてる？」

「OKっす！」

「そう。親さん、もう下に見えてるそうだから」

「そっか。早いなあ・・・」

そんなやり取りを端から見ていた広人が声を押し殺して笑っていると、古世に肩をポンと叩かれた。

「？」

「しばしのお別れ！泣くなよv」

「誰が！」

そう言うと、深くため息をつき

「行ってらっしゃい」と言った。

「行ってきますv」

プレイルームまで見送りに行き、古世がエレベーターに乗ったのを見届けると、病室に戻るため広人は歩き出した。

「ねえ、柏原君」

酒向さんに呼び止められ、振り向く。

「？」（本日二回目・・・）

「泣きたいのは・・・古世ちゃんだと思っんだ」
広人は少し微笑んだ。

「知ってます」

「外に出たら、また友達がなくなっちゃうんだから・・・」
「知ってます」

「柏原君・・・、もし退院しても古世ちゃんと仲良くしてあげてね？」

『友達ならそのくらいして当然だよ』

あの時古世はそう言った。
だから今度は・・・

「友達なんです。僕は友達は見捨てません」

「友達・・・、それでいいの？」

「え？」

「古世ちゃん、明るくて可愛くていい子じゃない？」

「それは・・・そうですけど」

「へえ、認めるんだ」

酒向さんはニタァッツと笑いながらいたずらっぽく広人を見る。

広人は頭の上に疑問符を浮かべていると、

「まあいいわ。古世ちゃんが帰ってきたらおかえりって言ってあげてね」

と言って立ち去った。

(8) 外泊・中編

古世が外泊した日のお昼過ぎ。

広人はプレイルームで、同じ病室の翔君と弥生ちゃんとトランプをしていた。

「お兄ちゃん、次お兄ちゃんの番だよ？」

トランプを持ったまま何かを考え込んでいる様子の広人を心配してか、翔君が声をかける。

「え・・・あ、うん」

「どうしたの？」

「広人お兄ちゃんはねー、古世お姉ちゃんの事が心配で心配で仕方ないのv」

いつからそこにいたのだろうか、酒向さんが口を挟んできた。

「そーなんだ」

弥生ちゃんが言う。

「ちょ、ちょっと・・・酒向さん何を」

「本音でしょっvさっきから焦点定まってるないよ？」

確かに、出会って間もない女の子と楽しく話せていて、気になってはいた。

心配もしている・・・。

「心配・・・です」

「やっぱり。でも大丈夫！古世ちゃんは元気で帰ってくるから」

「はい」

その頃古世は、母と一緒に電車で揺られていた。

古世の家は病院の最寄駅から約20分ほど揺られたところにある。

「古世、ごめんね。ちっともお見舞いいけなくて」

母親が申し訳なさそうに言うと、古世は優しく微笑んだ。

「いいよ。私も子供じゃないんだから」

「でも小さい子ばかりなんでしょ？」

「大丈夫だよ。私の事をお姉ちゃんって呼んでくれるし、何より」

古世は窓の外を見て、少し笑った。

「何より今は、同い年の子が一緒だから毎日楽しい！」

「そうなの！？良かったじゃない」

「うん。私の大切な友達なんだあ」

「男の子？女の子？」

「男の子だよ。ヒロは優しいし、いい人だよ」

「そう。だったら頑張らなきゃ、ね？」

古世が不思議そうに母の顔を見る。

「何を？」

「古世も女の子なんだから、恋の一つでも……」

「やだあ、そんなんじゃないって」

「でも、顔真っ赤だよ？」

「まち？」

「マジよ。大マジ！」

古世は慌てて俯いた。

「ヒロは本当に私の事良くしてくれるし……、一緒に話していると楽しいし」

「で、どうなの？」

「分かんないよ……。今まで友達すらいなかったのにどう思うかなんて……」

「でも、気になるんでしょ？」

「……うん」

「誰かの事が気になる」っていう気持ちは大事なことだからね。
自分にウソついちゃダメだよ？」
「うん」

私には友達がいませんでした・・・。

でも最近、気になる友達がいます。

その人は優しく、胸の傷を見ても”友達”と言ってくれた。

私はきくと、

ヒロの事が好きなんだと思います。

(9) 外泊・中々編

外泊2日目。

お昼過ぎから古世は、行きつけの美容室に来ていた。

入院の期間が長かったため、結構髪が伸びていた。ちょうど肩甲骨のあたりまで。

どうしても病院内の美容室は信用できず、切れずにいたのだ。

美容室の中には2、3人のお客さんが座っていた。

「おっ、古世ちゃん久しぶりだね」

店の奥から店長の犬飼さんが声をかけてきた。10年くらいの付き合いだから古世の事はだいたい知っている。

「久しぶりです」

「もしかして・・・、また病院？」

「エへへ、相変わらず」

「でも元気そうで良かった！俺、すごく嬉しいぞ」

「ありがとう」

「で、今日はどうする？」

「バツサリいっちゃってください」

犬飼さんは古世の髪を見ながら少し驚いたように聞く。

「いいの？こんなきれいな髪を」

「うんv」

「イメチェンってやつか？」

「まあね」

店のお兄さんは、ハサミを取ると威勢良く古世の髪をカットし始めた。

「古世ちゃん、何かあった？」

「どうして？」

古世が聞き返すと、お兄さんは楽しそうに笑いながら言った。

「古世ちゃんが髪型変えるときは、何かいい事があったときだから」

「うっ・・・、お見通しですか」

「俺、カミサマだから！なんてねV」

犬飼さんは楽しそうに言った。

しばらく沈黙がながれる。その間、ハサミを動かす音だけが響いていた。

「友達が・・・できたの」

「ほほう・・・。その様子だと男だな。ん？」

「な、何で分かるの!？」

「ククク・・・。顔赤いから」

古世は慌てて鏡を見る。真っ赤だ・・・。

「うわあ・・・、昨日もお母さんに言われたのに」

「その子の事、好きか？」

古世が振り向こうとすると、「うゝごゝくゝな!」とそれを阻止された。

「好き・・・なのかな」

「あせらず考えればいいと思うぞ？」

それからしばらく考え込んでいた。その間もハサミは進み、いつの間にもやら仕上げも終わっていたようだ。

「はいよ。こんな感じでどうよ」

鏡を見ると、ショートになった自分が映っていた。

「うん、ばっちりだよ」

「カラー入れとこうか？」

「お願い。カワイくして」

「了解♪」

数十分後、カラーリングが終わった。

「すごい・・・」

明るい茶色のメッシュが入っていた。

「アタックするなら早めだからな。俺はこのくらいしか後押しできないけどさ」

「充分だよ・・・。ありがとう」

お金を払うとき、さらにこう言われた。

「今度はそいつも連れて来いよ。もちろん、彼氏としてな!」

「もうっ!!」

外はまだ明るさはあるものの、星が見え始めていた。

その頃病院では・・・。

「らいだーきーっく!」

「うわぁー、やられたー・・・」

広人は翔君と仮面ライダーごっこをやっていた。

しかし頭にあるのは古世の事ばかり・・・。

初めて声をかけてくれた女の子。

初めて手を繋いだ女の子。

初めて心の痛みを教えてくれた女の子。

初めてボクの前で泣いた女の子。

そして今、すごく心配している。

ボクの中で古世が大きくなっていく・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4042a/>

命～mikoto～ Director's Cut

2010年10月23日02時27分発行